

## 小町薬師の靈驗伝承

明 川 忠 夫

一

各地の小町伝説地には小町像が多い。それは画像、彫像と多彩だが、美人の小町像は少なく、老衰の小町像が多いのはなぜだろうか。

熊本から北へわずか入った鹿本郡植木町小道小野は、小町の生誕した場所と伝えられ、いくつかの小町伝説が残っている。中でも小野泉水と呼ばれる池の前にあった小町堂の開帳が伝えられている。

七年めぐごとにご開帳というのがありました。三月十五日の日だけしか、小町さんのご神体、見せんのです。年に一回ごとこの部落の七国神社のお祭りとご開帳がだぶるのです。賑やいましたもんね。芝居、村芝居がでたり、向こうの方には、アヤツリ人形かなんかも出て……。前は盛大だったですね、小野の開帳というと。熊本の市内からも見に来たという人が居るのです。

拝めば美人になるように、それから、やっぱりあ、神社の横のな

小町薬師の靈驗伝承

げしのところに髪を切ったのを奉納して願立ててね、祈った。よ  
かおなご、女子よか娘が生まれると言ってるね。

いつの頃からか、小町堂に美しい小町像が祀られ、七年めぐとの  
採録地 植木町小道小野<sup>①</sup>



七国神社の小町像

ご開帳がなされるようになると、美しい小町像は伝説化される。七年めぐとしか拝めぬ現実が、より美しい小町のイメージを描かせたのか、小町堂にお参りすれば「よかおなご、よか娘が生まれる」という伝承を生みだし、熊本を含む近隣からのお参りで賑ったのであった。が、小町堂が昭和二八年に水害にあって流失し、周囲の景観も一変してしまった。

翌年、小町堂のそばにあった七国神社内に新しい小町像を安置したが、この伝説は新しい像とともに引きつがれなかった。長年の信仰の対象であった小町像と小町堂の流失ということが、伝説の芽をつみとったともいえる。さらに伝説としての内容が、単に「美人になる」ということだけで、伝承されにくい面を持っていたようである。「美しさ」は小町の側面だが、「美しさ」を鮮明にする対立の要素がなかったし、日常生活の上で、イメージの違った新しい小町の「美しさ」は、切実なものではなかったからである。

これが、小町老衰像なら別である。小町は美人という先入観が、老いた小町との対比の中で一つの感慨を与えるからである。それは、美しい者でもこんな姿になるということである。小町老衰像が多いのは、小町は美しいという伝承ののっかってのものであったことがわかる。老衰像が伝承する要素を持っていた理由である。伝説は具体的な事物と切り離しては成立しにくい、小町堂の流失ばかりで



大津市逢坂 月心寺の小町百歳像

は説明できない伝承の核が、小町像の中に内在していることになる。それは対立の要素である。壮（美しい小町）と衰（老醜の小町）の小町像が対になって各地にあるのも、同様の効果をねらったもので、絵解きによく使われる。

中世の小町伝説を改めて考えてみると、老衰零落の小町が主人公であるものが多い。『謡曲』の小町物をみても、若き小町は「草子洗小町」だけで、「卒都婆」「関寺」「鸚鵡」「通い」の各小町物は、老衰零落の小町である。『お伽草子』の「小町草子」も同じである。多くの男との過去の悪業を懺悔することによって救済されるという、いわゆる「色懺悔」が伝承の中心にすえられている。

有名な彌樓伝説も同様である。この伝説は人気のあったものらしく、多くの書物に記録されている。

秋風のうち吹くごとにあなめあなめ

小野とはいはじすぎ生ひけり

人の夢に、野途に目より薄生ひたる人有り。小野と称してこの歌を詠む。夢覚めて尋ね見るに、一つの彌樓有り。目より薄生ひ出でたり。其彌樓を取りて閑かなる所にこれを置くと言へり。小町の屍と知ると言へり。

〔袋草紙〕

彌樓伝説は老衰零落の小町ではないが、小町が彌樓になっているだけで、型は同じである。美しい小町という伝承が聞き手の側にあるからこそ、この伝説は人気があったはずである。美しい小町と彌樓との対比が新たな感慨、たとえば無常を誘うわけである。同様の例は小野小町壯衰絵巻、いわゆる九相詩絵巻にもみられるが、ここではふれない。

小町伝説の側面は「美しさ」にあった。老衰の小町を出すことによって、壮と衰、美と醜の対比を誘い、それが伝承される要素になっているようである。が、衰や醜の部分は往々にして隠されている場合がある。

これから述べる小町の薬師靈験伝説がそうである。この靈験伝承

小町薬師の靈験伝承

がどのようにして人々に受容され、伝説化されていったのか、いろいろな側面から見ていく中で、壮と衰、美と醜といった両義性を改めて検討し、伝承される秘密をさぐってみたい。

一一

小町伝説で多いのは、薬師の靈験伝承である。米沢市小野川温泉のものをあげる。

A 仁明天皇の寵愛をうけていた小町は、父、小野良実の行方をたずねて、みちのくへの旅にでた。時に十八歳であったという。

置賜の吾妻川のほとりにたどりつき、水に映ったわが姿を見て、おどろきのあまり氣を失わんばかりであった。花のかんばせは長い旅にやつれてはて、乱れた黒髪は鬼女面さながらに見えた。

小町は嘆き悲しみ

吾妻川流るる波に立ち寄れば

いつしか映る面影ぞ見ゆ

と一首をよんだ。それから吾妻川を鬼面川と呼ぶようになった。

小町は落胆のあまり、この地で病み伏していたが、一夜夢に老翁があらわれて近くに靈湯の湧く所があるから入浴するようにと教えられ、たずね当てたのが、小野川温泉のはじまりといわれる。いま尼の湯と呼ばれるところが湯元であるという。

一七

旅のつかれもいえて、父ともめぐりあえた喜びに、近くに薬

師堂を建てて、村人の病をすくってくれた。

〔出羽の伝説〕角川書店

B 小野小町は会津街道の途中に、この先に関町ちゅうところがある。そこに病人になって泊ったとこやいうて……そこは小野小町の一代神の春日様で泊った。

まんず、言い伝えだけどなあ、小野小町はハンセン病だっていって、顔などみな悪くなっちゃったそうなの。

そして、ソノ、一代神の春日様が、夜、夢枕にたつて、ここから一里半も下ると、よしの中にお湯がわいているから、そこに泊って湯治すると治るちゅう夢ずらすら。そんで、ここ、まだまだ藪やなかつたべな。そして下つてきたら、よしの中にあつたのが町の真ん中に今、尼湯つてあるんだ。それが小野小町が開いたお湯だと。そして、そこへ泊つたらしいなあ。

そして、この川、鬼面川ちゅうんだ。自分の顔を川に写して見たんだが、鏡がなかった時分なんだな、歌をうたった。

吾妻川流れる岸に立ちよれば

何時しか映る鬼の面影

したところが、自分の顔が鬼のような顔になっていて、それから鬼面川となった。病気は治った。

Aの『出羽の伝説』は、小町は長い旅によってやつれ、鬼女面さながらになったというものである。こうした言い方は、現地の小野川温泉の小冊子も同様で、「旅の疲れで病身」（小野川温泉旅館組合編）と記載されている。また、小町が勧請して建立した、小町薬師のある金乗院の由来書も「時に小町は旅の疲れで病身となり」と同様の説明がなされている。

Bの方は「旅の疲れで病身」といわず、「小野小町はハンセン病だって」とはっきりといわれ、鬼女面がハンセン病によるものであることが推定される。ここではじめて、病を背負って放浪する小町が、立体的に浮んでくる。

『小野川村温泉由来の事』（鈴木正道『置賜文化』五五号）によると、小町は「旅路のつかれにや疾瘡になつませ給ひ……三州峯の薬師に御参籠あり」と書かれているからである。そして、この由来の事には「村雨の」の歌が記載されている。

村さめの一時のまにふりてらす

おのがみの笠ここにぬぎなけ

後に論ずるように、この歌は小町が薬師如来に病気回復を祈願した「南無薬師」の歌と対になっているのだが、「南無薬師」は記載されていない。『出羽の伝説』、「金乗院の由来事」（温泉旅館組合編）

の小冊子も同様である。病気の小町伝説では湯浴客が来ないから、かなり古くから「疾瘡」と二つの歌は切り捨てられ、「旅の疲れで病身」と改作されたと思われる。瘡のある伝説は営業面、現実面からの抵抗があったのであろうか。瘡の人の苦悩は眼中にない改作の仕方である。現地で現在、二つの歌を知っている人はいない。

元来、この温泉は「伊達時代には尼湯」（『米沢考現記』天明年間成立か）と呼ばれているように、尼が開いたところと思われる。そうしたところへ遊行者の比丘尼の小町が「尼法師とならせ給」（『小野川温泉由来の事』）いて、ここに三州峯の薬師の靈験をもちこんだのであろう。

小野川温泉の瘡と二首の歌の欠落した小町伝説をあげたが、こうした欠落の例は『日本の伝説』などに多い。伝説は現実の生活に都合のいいように変容するものと言ってしまうまでもだが、改作したものを書くのはまちがっていないか。変容の過程は貴重であるが、改作そのものは伝説ではない。伝説の核があるはずである。

Aの内容では、なぜ小町伝説が伝承されてきたかは、さぐれないことになる。「花のかんばせ」とあるが、小町の美しさはさほど強調されていないし、「鬼女面」の小町も中途半端である。いわば、全体に盛りあがりに欠けた伝説となっている。したがって、むしろ隠された部分「鬼女面」、即ち小町の「醜」の中に小町伝説の核が

内在していることになる。

### 三

薬師の靈験伝承で重要なことは、小町は瘡病みの人として描かれていることである。瘡病みの小町だからこそ各地に小町伝説が生まれたのである。

「小町」が瘡になった史実はないが、瘡になってもおかしくない小町零落放浪の伝承があった。

小町伝説は平安中期から末期にかけて、主として芸能巫女によって受け入れられ発展していく。遊女、歩き巫女の類である。中世になると好色小町となり、そのなれの果てが瘡毒（梅毒）に悩む小町となる。

小町伝説の伝播者の一人、熊野比丘尼は南北朝の頃から遊行の人となる。江戸時代になると宗教的な活動の支えをさらに失なうて地獄、極楽の絵解きや熊野の牛王宝印売りをする一方、歌比丘尼、色比丘尼、売比丘尼の傾向が強まってくる。私娼である。

くまのはを時たまむこはかいに行き

（熊野比丘尼を買う婿）

いたづらに本名を聞くびくに買い  
百出すととんだ牛王出して見せ

(百文が熊野比丘尼の値段)

これらは江戸時代の古川柳だが、私娼を含めて多くの遊女が苦しんだのは瘡毒やハンセン病で、死に至る病とされた。この病にかかると自ら故郷を捨て、何がしかの路銀を貰って比丘尼や巡礼などの姿とならざるをえなかった。放浪して喜捨を受けやすいからである。しかし、現実は乞食と同じだった。いや乞食よりも悲惨だった。病気の故に、いわれない差別や蔑視をうけた。

小町伝説地の瘡で多いのは、梅毒、疱瘡、そしてハンセン病である。

昔の瘡いうたらね。体に吹出物みたいなものできてな、ホテ、鼻も腐つてもげるというてな。若い時は鼻のない人が来た。

採録地<sup>⑩</sup> 松山市小野町

これらの病は前世の悪業の報いといわれた。この見方は仏教の差別的認識<sup>⑪</sup>につながるものだが、それだけに病気にかかると仏への祈りがすべてであった。

「小野小町、深草の少将を偽り、命を捨てしめし報いとて世に交り難き病を受けて」(『小野山正観寺法輪縁起』文政六年成立)と現世での悪業の消滅を願う小町の薬師靈驗は、一人の比丘尼の祈る姿でもあったろう。小町伝説の伝播者の一人の比丘尼が瘡に苦しんでいた状況は、先の私娼比丘尼やムラや家族を捨てた比丘尼で推定

される。比丘尼には、さまざまの人がなったと思われるが、瘡に苦しむ人は小町なのであった。小町が瘡に苦しむ一人であったことは大切である。小町は瘡であるが故に瘡に苦しむ人とともに参籠し、薬師に祈る形をとる。聞き手をも救済していくのである。日毎、腐りゆく己れの肉體、鼻をつく悪臭、現世の悪業をひたすら願うが薬師は答えない。

百日めの満願の日、小町は歌を詠む。

南無薬師種病悉除の願あれば

身より仏の御名ぞ惜しけれ<sup>⑫</sup>

これだけ祈願しても病は治らない。これでは薬師の名前がすたりますよという、仏を洞喝した歌である。洞喝した歌になったのは、精神的にも肉體的にも追いつめられていく、ぎりぎりの気持を詠んだものであるからであろう。仏を洞喝した言い方は、『しんとく丸<sup>⑬</sup>』に見られるように、絶望の状況の裏返しである。

夢であつてもいい。全体にひろがるみにくい瘡、かつての美しい顔や肉體が元にもどつたらという願いが、薬師による奇跡を生み出す。

春雨の降ると見しか晴にけり

その箕笠をそこに脱おけ

と薬師の御声がして瘡は治る。「身の瘡と箕笠」を掛けた意の歌

である。「不真面目な言語遊戯―一種の秀口・地口のたぐい」<sup>⑤</sup>の歌といえはそれまでだが、むしろ、瘡によって追いつめられた気持を、この歌に託せずにおれなかった心が描かれていると見るべきであるう。

奇跡は現実の事象ではないが、絶望的な状況から願望が昇化され、靈験を生み出すのである。奇跡はくりかえし語られる中で、意義づけられ、権威づけられて靈験となる。靈験は伝承される価値をもってくる。四国の遍路の札所に多くの靈験が語られているのと同じく、奇跡がなかったら、この小町靈験伝承は各地に広がることはなかったであろう。

#### 四

瘡の小町伝説は、小町を名乗る遊行者が薬師の靈験を持ち歩いたから伝ったものである。が、かんたんに靈験がムラに受け入れられたのではない。

ムラにとって遊行者はヨソモノで、乞食に等しい。ヨソモノはムラの日常的な平和を侵犯する存在であったので、ムラはたいへんな警戒心をもっている。同時に遊行者は、ムラの外からやってくるだけに「賤視の底に言いしれぬ怖れ」<sup>⑥</sup>を持っていた。

とくに病気の侵入は、もっとも恐ろしいものであった。サイの神

道切り、抱瘡神などがムラの入口にあるのは、その為である。病が流行するとムラは全滅するからである。

乞食同様の遊行者の一人、小町がムラに簡単に入れないのは当然のことであった。小町の側からすれば、土地にみあった靈験を積極的に語る必要があった。それは唱導の遊行であるが、何よりも生きるための手段でもあった。したがって、ムラと小町との生をかけた葛藤の歴史のあとで、各地の薬師の靈験は根づいていったはずである。

こまつつあんが、たずねてきた時はね。顔やそこらに、ぶちゅぶちゅがいつばいできてね。まあ、あの人は美人やそうなけど見るかげもなかったそうな。きたないかっこうで泊らしてくれいうてね、たずねて来やった、どこもよう泊らやてなかってね、いやいうて。

ところが、私の家の直助という先祖が、そのじぶんは、どてらいよかつたららしいですわ、身上がね、ほんで直助という人がね小町をおっちやって、こまつつあんが泊ってね、ほんで何ですわ、こまつつあんが湯の谷という所へ療治に行きよっちやって。湯の谷というのは、このむこうにありまんね。まあ、それで治ったんですな、治って帰っての時にね。この人が帰っちゃってから悪いやまいが、はやったんですわ、どこやかや部落中にはやって、し

かし、うちだけはだあれもそれに、かからなんだちゆうてね、妙なこっちやいうてね。

採録地<sup>⑩</sup> 福知山市今安小野脇

「ぶちゅぶちゅ」ができた乞食女は、ムラに泊めてもらえなかったのは当然であった。病はムラを破壊する。直助はムラの反対の中で乞食女を泊める。小町のような者が来た時、世話をする宿のような所が直助宅かも知れない。ムラには、遊行者の宿になる家が決っている場合が多い。やがて、ムラに熱病が流行する。しかし、直助は病にかからない。遊行者を泊めるために直助一家は免疫性を身につけていた故とも考えられるが、話の筋としては、当然、靈驗を語る上に登場してきた人物であるからである。

この後の内容はこうである。「熱病は乞食女の悪病がうつったものだ。即刻、村から追放せよ」と直助は責められるが、直助は身をたいて女をかばい、薬師堂に籠っている女に謝れという。ムラ人は乞食女に謝り、女とともに薬師如来にお祈りし、池の湯で身を拭くと熱病は治る。

この時、乞食女はムラの熱病を救済した女として聖視され、小町の病気も満願の日に治るようになっていく。そして、「ぶちゅぶちゅ」の治った乞食女は、天女のように美しくなる。問われて誇らしげに小町を名乗る。賤視から聖視へのあざやかな変身である。忌避

された存在が畏怖される存在に転化する。ムラを救済したこと、救済した小町を泊めた家が誇りとなって、土地と小町、家と小町を結びつけ、伝承されるもう一つの核となっている。乞食女が、実は熱病を救った美しい小町であったという対立の要素（醜と美）が、この伝説をふくらませ、土地や家と結びついてより真実らしく伝承されてくることになる。

ムラと小町との葛藤の歴史は、小町が遊行者であるだけに続くのである。

## 五

小町の薬師靈驗伝承は、各地でさまざまな小町伝説を生みだしている。靈驗の後、小町がその地で余生を送って死んだ場合、しばらく滞在した所がお寺になった場合、そこで自殺した場合などである。

中でも、薬師に祈っても治らないので自殺した小町の伝説は、靈驗を語る意味で注目される。祈っても治らない現実があるが故に、奇跡は意味をもってくる。自殺という矛盾した小町の姿の中に、靈驗の伝説を荷う側と受け入れ側の姿がうかんできるところである。

小野の小町は治ったというのですけれど七日間お籠りをしまして、それからちょっとおかしいんですよ。それから世をはかなん

でというのはです。世の中をはかんで身を投げたというのですよ。<sup>⑩</sup>身を投げまして小町の黒髪が、アノ、イグサに、たたみの表のイグサになったというのですよ。

採録地<sup>⑩</sup> 栃木県下都賀郡岩舟

式部が病気、昔は瘡と言いつたのですが大きなモノができてですよ、お薬師さまに参拝しとったけれど、どうしても治らん。それで、下に藍染川を渡る時に、そのモノのできたお方が薬師に参って治りませんかから、そこへずっと下っていきよつたですよ。

そうすると、白い仕度をした人に会いまして、そして、アノオ、藍染川を背負って渡してくれんかということですよ。白い仕度をした人が、式部を背負ったのです。エエ。ところが、あんまり何かできているので背負うのを断ったとですよ。それから、また、モノが、瘡が、えらいひどく激しくなつたですよ。それで断つたそうですよ。いま展望台になっている身投げ嶽で、式部は身を投げてとんだ、ところが、アノ、薬師が助けてやったという伝説ですが……

瘡は治って、結局、りっぱな薬師さまじゃつたということ。

採録地<sup>⑪</sup> 宮崎県諸県郡国富町

あとの国富町の方の伝説は、小町が主人公でなく和泉式部になっているが、内容は全く同じ薬師の霊験である。主人公がちがうだけ

である。

薬師の霊験の小町は瘡に苦しみ、絶望の淵に立たされようと、瘡を救う人でなければならなかった。小町は伝説の荷い手であると同時に、瘡を救済する薬師の化身にならなければならなかった。小町を名乗る瘡病みが、自らの病に絶望して身を投げて死んだ伝説があるのは、その故である。絶望して身を投げる瘡病みの人の中に小町がだぶる。小町は沈黙していない。小町は薬師の化身であり、瘡病みの人なのである。ここに小町伝説の「語りの空間」<sup>⑫</sup>が成立する。語りを荷う側と聞き手が共有する世界がある。両者の瘡が治って欲しいという願いが二重写しから焦点があう時、身を投げた小町は救済される。救済されることが伝承される理由となっていく。小町薬師、小町神社が生まれる理由である。

薬師の霊験の小町は自らの瘡に絶望してしようと、救済の小町にならなければならなかった。小町自身が身を投げたとしても、薬師の霊験が変化するはずはなかった。瘡が治らなくても、奇跡を信じることは捨て切れなかったのである。ここに、瘡病みの人の切なる気持が読みとれる。

「小町」は好色の果てに瘡にかかっても不思議でない伝承をもっていたので、薬師の霊験を支えてきたのである。瘡の小町を支えてきたのは、医者に見捨てられた病を持つ人々が多かったのではなか

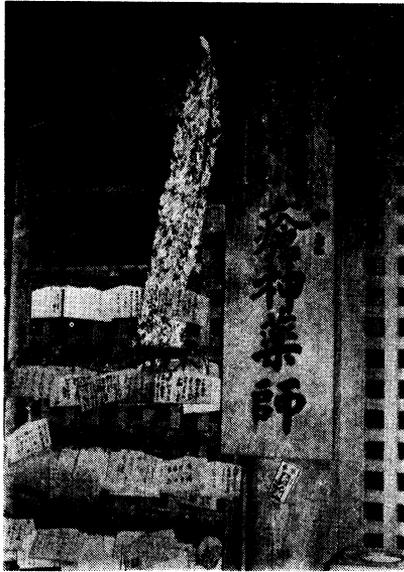
ったか。

アノ、お医者さんが手切った病気でも、願かけたら治った言いましたよ、アノ、遠くの湯山村からもお参りに来よる。

採録地 松山市小野町

かつて、若道による瘡に苦しんだと思われる比叡山の北谷の児が主人公であったのが、この薬師の靈験〔醒睡笑〕六、『一休閑東話』上〕であった。この伝承が京都の誓願寺系や三河の鳳来寺系<sup>②</sup>などの薬師の唱導に、そっくり活用され、小町という女性が新たな主人公となって広がりのあるものになっていった。

昔は花柳界の信者の人……女の人が多かった。今でも、きまり



延算寺の瘡神薬師

が悪いという病気の人が見える。瘡だといったら瘡神さまは、どんな病気でも治してくれたというのです。マア、下が専門であるけれど……そんな言い伝えがある。

採録地 岐阜市岩井岩井山延算寺

「瘡だといったら瘡神さまは、どんな病気でも治してくれた」とは、何とやさしい包容力のあることばだろう。瘡神さまとは小町をさしている。瘡神さまはムラで生まれたものだけに、<sup>③</sup>全てを包容するものがある。どんな瘡なのか、どんな前世の悪業かを問わない瘡神さまは、人々の心をうつものがあつたにちがいない。

瘡はすでに何度も述べたように、多くの皮膚病を指しているが、人に言い難い多くの瘡があつたことは想像に難くない。前世の悪業を忘れさせる、あたたかい言葉ではないか。このやさしさは、小町伝説のもつ広がりをも意味していないか。

「小町」は、どんな境遇の女性であっても、つつみこんでしまうからくりを持っている。好色の女、驕慢の女、そして零落放浪の女である。零落放浪の女こそ、式部伝説にない巾広さ、あたたかさといえる。「小町」のもつ庶民性といつていいかも知れない。

この庶民性は仏の属性であるとともに、小町伝説を持ち歩いた巫女的属性と一致するものであろう。難産を救ったり、水を発見したり、蛙封じをしたりする巫女小町の痕跡は、今も各地に伝承されて

いるからである。

今まで論じてきたように小町伝説の一面の「美しさ」は、瘡の小町であっても変っていない。醜と美の中で霊験が語られていく。

瘡故に人々に忌避された小町は、自らの素性を隠しながら自分の苦悩を語る。その時、逆にそれを誇りとしながら、ともに聞き手を救済していくのである。「光がさすほど美しい」小町の美しさは、瘡の苦しみから解放されたいという願いが、凝縮したものである。美しさは奇跡であり、奇跡が起こることによって伝承されるのである。

小町伝説の秘密は「壮と衰」「美と醜」さらに、「誇示と隠蔽」「畏怖と忌避」という両義性と小町のもつ庶民性の中にあるといえる。

その意味で、小町伝説の核は両義性の中に存在するし、冒頭で述べた小町老衰像も美しさとの対比だけでなく、罪業救済の巫女的小町の面からも見なければならぬだろう。

- ① 話者 木村学氏（明治三十八年生）。
- ② 片桐洋一氏『小野小町追跡』六頁に、学生におこなった小町アンケートのついで。高校生以上を対象にしたものだが、小町について知っていることを書かせたら、実に六十八パーセントの人が美人をあげている。
- ③ 拙稿「山城の小町伝説」（『民間伝承集成』五巻）。
- ④ 『江家次第』『和歌童蒙抄』『無名抄』他。
- ⑤ 注③と同じ。

小町薬師の霊験伝承

- ⑥ 話者 後藤亀次氏（明治四十年生）。
- ⑦ 立川昭二氏『日本人の病歴』一〇一―一一一頁参照。
- ⑧ 宮本常一氏『忘れられた日本人』（『著作集』十巻）二二〇―二二二頁参照。
- ⑨ 奈良県下に小町を祀った抱瘡神社がある。
- ⑩ 現在、調査の段階でわかっているところは、論文中の場所の他に、東京都国分寺市にある。この地については『民間伝承集成』五巻の石原昭平氏の月報参照。

⑪ 話者 平岡タマヨ氏（明治三十四年生）。

⑫ 横井清氏『中世民衆の生活文化』三一三―三一六頁参照。

⑬ 『小野山正観寺法輪院縁起』記載のもの。後の引用の「春雨の」の歌も同じ。

⑭ 長者夫婦が京都の清水寺のご本尊に子どもが欲しいと祈る。「まことにお授けないならば、御前再び下向申すまじ、御前にて腹十文字にかき切り臍腑つかんで繰り出だし、御神体に投げかけ……」とご本尊を洞喝している。生まれたのが、しんとく丸である。

⑮ 小林茂美氏『小野小町歌』二二〇頁。

⑯ 筈原伸夫氏「中世芸能における賤なる者」『伝統と現代』四十号。

⑰ 話者 片岡まつえ氏（明治四十年生）。

⑱ 細矢藤策氏の「小野寺旧記ならびに本尊薬師堂再興縁起」（栃木県高教研国語部会『国語』十五号）によると、『小野寺旧記』（宝暦十四年）では小町は身を投げたのでなく、参籠して病が平癒したので随喜の涙を流して黒髪を切ったとある。が、ムラでは身を投げて死んだことになっている。イグサは、この土地の特産物で小町の黒髪と結びつけたらしい。

⑲ 話者 林慶忠氏（昭和五年生）。

⑳ 話者 日高敏夫氏（昭和三年生）。

- ⑲ 桜井好朗氏『中世日本文化の形成』三〇五頁。  
注、⑳と同じ話者。
- ㉑ 柳田国男氏「女性と民間伝承」(『全集』八卷)参照。
- ㉒ 話者 道家晟綱氏(大正六年生)。
- ㉓ 延算寺の瘡神さまは秘仏となっている。ご住職の道家氏によると、瘡神さまは素人が彫ったような粗末な石仏という。このことは、小町薬師がもともと小さな祠とか、お堂に安置してあったことを示している。粗末な小町薬師は京都府の丹後半島にも見られるし、素人の薬師仏の奉納もムラでよく見かけるからである。現在、瘡神さまは延算寺の管理だが、もとはムラの管理であった。ムラで育った瘡神さまは、後世に立派なお寺の下に入っていくようである。
- ㉔ 拙稿「巫女小町賞書」『同志社国文学』十八号。